

魔法少女

小説 火村龍

挿絵 ユズリハ

# リリナ & ミリア

異種交配の罠

立ち読み版



序章	淫虐の実験場、希望の魔法少女	006
一章	仕掛けられた罠	019
二章	現れる悪、ミユの真実	060
三章	改造される肢体、異種交配の悦楽	092
四章	突然変異体、加速する交配陵辱	145
五章	闇に吞まれる光	202
終章	淫堕の魔法少女	248

## 登場人物紹介

Characters



### リリナ

街を守る最強の魔法少女の一人。攻撃系の魔法が得意で、街の住民や他の魔法少女から全幅の信頼を寄せられている。魔法が強力すぎて周りから怖がられてしまっているのが悩み。



### ミュ

リリナとともに街を守る魔法少女。もう一人の最強の魔法少女であり、パートナーとしてサポート系の魔法でリリナを助けるのだが……!?

### クロウブ

魔族軍団ヴォルベイドの指揮官。魔法少女たちを使い、最強の魔物を生み出すための異種交配実験を行う。

## 序章 淫虐の実験場、希望の魔法少女

手袋に包まれた手に汗が滲むのを感じた。感覚が研ぎ澄まされ、緊張と昂奮に脈打つ己の心臓音も、分厚い壁一枚隔てた向こうから聞こえてくる警報の音も、すべてが遠くに聞こえた。リリナにとつて、それらはまったく重要ではなかった。激しい闘いの中で刻まれた傷が怒り狂ったように熱を持っているが、その痛覚さえも、どうでもいい。五感のすべてを、この闘いに注ぎ込んでいた。

金色の瞳に映る世界は、なにもかもが止まっているようだった。宙を舞う金属の破片も、オークの口から飛び散る涎も、リリナはそのすべてを捉えることができた。オークの股間は、股布の上からでもはつきりわかるほど屹立していた。闘いの最中でも、リリナの身体に欲情しているのだ。

「ぐへへ。ぐちよぐちよに汚れて、エロい格好してるじゃねえか」「犯してやるぜリリナあ……」オークどもが言った。下劣な台詞。だがそれは、リリナのいまの姿を的確に表している。少女の身体を包み、聖なる魔力の加護を与えてくれるコスチュームは、まだなんとか本来の色——金色を基調としたその美しさを保ってはいたが、あちこちに、いままでの戦闘で浴びせられた敵の汚汁が染みついている。それは確かに、リリナが魔族に勝利してきたことの証でもあったが、敗北してなお、女を発情させようとする魔族の穢らわしい

意志でもあった。

——どうでもいいわ。いまは、そんなことどうでもいい。

リリナはオークの言葉、そして自分がなによりも大事にしている魔法衣のことを、すべて頭から消し去った。

知性の欠片もない豚魔物。仲間の魔法少女の一人がそう言っていたのをふと思い出す。オークは魔力を纏った棍棒をリリナに向かって振り下ろしている。リリナを殺すためではなく、無力化するための束縛魔法がかかった棍棒だ。オークは二体。他にはいない。目の前の二体を倒せば、その向こうにいる男に届く。

——ここまで来た。

リリナは全身でそれを練り上げた。異界からやってきた侵略者と闘うための力——魔力。身体のコが熱くなり、リリナはそれに身を委ねる。髪が波打ち、踏みしめたブーツの底から、金色の光が波紋のように広がっていく。

「ハアアアアアアアアッ！」叫んだ声が、ずっと後から聞こえてくる。両手で持った杖をさらに固く握りしめる。リリナは大きく踏み込み、自身の身体ほどもある長い杖で横一線に薙ぎ払った。

オークの下卑た笑いが消えた。笑みを浮かべたまま、二体の化け物は穢らわしい淫気に満ちた体液を撒き散らし倒れた。すでに汚れきっていたリリナの全身に、さらに汁が降りかかる。少女はそれを気にもとめない。杖を振りきり、そのまま走り出す。ブーツから発

せられていた魔力の波動が爆発する。波動は少女の全身に駆け巡る。リリナは加速する。

「これで終わりよ、クロウブ!!」

オークの向こうに立っていた大男——クロウブに向かって言い放つ。クロウブは鎧を着込み、血のように赤い目を怒らせ、唸りとともに前に出た。

「貴様——リリナアアツツ!!」

クロウブは背負っていた大剣を構えた。リリナの背から魔力が光の粒子となって噴出する。魔法少女は矢のように跳んだ。

リリナの手から杖が消える。魔力の塊となった杖は、少女の右腕に収束する。自身の魔力を一点に集めたりリリナは、勢いのままにクロウブに突っ込んだ——。

分厚い壁の向こうで、魔族が駆け回っているのが聞こえる。リリナはこの部屋に通じる唯一の扉にロックをかけた。研ぎ澄まされた感覚は元に戻っていた。止まっていたように見えた瓦礫はあつという間に床に落ち、むせ返るようなニオイが鼻をつく。淫気を吸い込み、身体の奥が熱くなるのを感じる。リリナは大きく息をついた。

指先にともした魔力に、自分の声を吹き込んだ。

「クロウブは倒したわ。これからみんなを助けて脱出する」

魔力は小さな陣を描いて消えた。リリナがいまいる場所——魔族の要塞から、外で闘っている仲間のもとへ転移したのだった。

床には、何体もの魔物の亡骸が転がっていた。オーク、ゴブリン、蛸、蜘蛛……そして、敵の司令官であるクロウブ。鎧を着た大男——幾度となく戦場に現れ、リリナたち魔法少女を苦しめた魔人は、白目を剥き腹から体液を流し、完全に事切れている。それを確認したりリリナは、隣の部屋に走った。

「みんな！ 無事!？」

部屋に飛び込んだリリナは叫ぶ。その声に、魔族の要塞には似つかわしくない、可愛らしい少女たちの声が反応した。

「リ、リリナ……さん……?」

「なんてことを……!」

そこに広がっている惨状に、リリナは息を呑む。この部屋になにがあるのかはすでにわかっていた。あの大男クロウブは、闘いに敗れた仲間の魔法少女たちを攫い、この要塞に拘束していたのだ。それも、ただ拘束していただけではなかった。

この部屋は、巨大な実験場だった。部屋の隅には地球のそれによく似たコンピュータが置かれ、無数の機械類が部屋中を埋め尽くしている。ドロドロの培養液が詰まったカプセル。なにに使うのかわからないアームがついた拘束機械。リリナは機械の一つに駆け寄った。そこには、リリナと同じく正義のコスチュームに身を包んだ少女が拘束されている。だが、その衣装は、機械が噴射する汚汁に穢され、アームに斬られ、見るも無惨に破壊されていた。少女の艶やかな肌は汗にまみれ、上気し、官能的なニオイを放ちながらうねっ

ていた。むき出しにされた乳房には吸盤のようなアームが張りつき、乙女の大事な場所は振動する突起物で刺激されている。駆動音が響くたび、少女は「ひううっ」と嬌声を上げ、たまらないといったように身体を硬直させていた。

「リリナさん、助けてえ……」

「ええ、すぐに解放してあげる！ もう少し頑張って!!」

リリナは両手に魔力をともし、機械を破壊し少女を救い出す。その間にも、少女は何度か気をやり、「あぁっ、アアアッ！」と喘いだ。魔族の淫気は、女の身体を妖しくくすぐる。リリナは唇を噛みしめた。ここにたどり着くまでの闘いで、淫毒をたっぷり含んだ体液を浴びた身体が、少女の声に呼応するように熱を帯びてくる。リリナは強靱な精神でそれを抑え込んだ。

「ま、魔力が吸い取られる……っ！ いや、ああ、だ、だめえええ……」

「くっ……みんな……っ！」

囚われた魔法少女は一人だけではない。いくつもの拘束機械、そのすべてにリリナの仲間が囚われていた。別の機械では、少女の股間から、彼女の力の源である魔力を吸い取っている。身体中に液体を振りかけられ、全身くまなくブラッシングされている子もいた。入念に股間や乳首を擦られ、悶絶している。カプセルの中では、穢れきった魔法少女が白目を剥き、意識を恍惚の彼方に追いやられ無様なアへ顔を披露し、陸に打ち上げられた魚のようにビクビクと激しく痙攣している。リリナは汗みどろになりながら、その一人一人



を解放していった。一人を解放することに、少女たちの苦しみ、悲しみ、そして絶望が、リリナの中にタールのように重く沈殿していく。

(ヴォルベイド……わたしたちの魔力を吸い取って、一体なにをしようとしているの……?)

部屋に囚われていた仲間の最後の一人を解放しても、リリナの表情は暗れるどころか、焦りの色は濃くなるばかりだった。

実験場には、機械類の置かれたこの部屋の他に、もう一つの部屋がある。リリナは壁一面に張られたガラスに駆け寄った。

「こんなことまで——!!」

唇を噛みしめる。そこは肉で創られた部屋だ。肉壁から毒々しい色をした触手が無数に伸び、人の腕ほどもある身体を振り、穢らわしいエキスを撒き散らしている。当然のように、そこに閉じ込められているのは敗北の魔法少女たちだ。全員が残らず触手に犯され、その可憐な肢体をまさぐられている。

リリナは悲壮な想いと怒りを胸にガラスを叩き割り、肉部屋に飛び込んだ。

「この……っ！ みんなを放しなさいッ!!」

新たに現れた少女を、触手は餌だと認識したようだ。四方八方から迫る、知性の欠片もない淫欲生物を、リリナは両手両脚に魔力を込めて迎え撃つ。だが、どれだけ倒しても、触手は次から次に湧き出てきてキリがなかった。

「んひいいいっ！ ひぎっ、んほおっつっ!!」

「触手の精液なかだしっ！ イグッ、イツチャウウウウウっつっ!!」

触手に応戦しながら、リリナは魔法少女たちが次々と絶頂し、よがり狂うのを見て絶句した。肉部屋に入れられてまだ日が浅いのだろう、コスチュームをかるうじて纏っている少女たちはリリナに気づき、「リリナ……」と手を伸ばすが、いき狂う魔法少女たちはボディスーツをほとんど剥ぎ取られ、手袋とブーツのみという恥辱極まりない姿で陵辱されていた。リリナの姿も見えていない。快楽に支配されているのだ。

「リリナ、わたしたちは後でいい！ ここにミュが……あひいいいっ、も、もういやあつっ!!」自我を保っている少女たちが叫ぶ。リリナは彼女たちに手を伸ばすも、「早く!」と怒鳴られ、心を鬼にして奥へと進んだ。

「くっ、やめなさいっ！ はああああっつ!!」

ブーツやボディスーツに、触手は次々に巻きついてくる。リリナは魔力を放出しそれを振り払う。

(ミュがいてくれたら……!)

歯がゆさに唇を噛みしめる。リリナは一对一の戦闘でも桁違いの力を発揮するが、こういった低級の魔族を、その強大な範囲魔法で倒す方が得意だった。だが、多数の仲間が捕らえられているいま、それを撃つことはできない。いつもリリナの隣にいるはずの彼女さえいれば、気兼ねなく撃つことができるのだが――。

「ミュ、どこにいるの!？」

リリナは触手の海で叫んだ。リリナが無理を押しつけてこの要塞に単騎突入した理由は、クロウブを倒し仲間を助けるためだけではない。数日前の戦闘で連れ去られてしまった、大切なパートナーを見つけるためでもあった。リリナは触手をかき分け進んだ。肉の中に何度もブーツが埋まり、そのたびに穢らわしくイヤらしい肉の感触が伝わってくる。

「うううっ」大事なところが潤むのを感じ、リリナは呻いた。最強の力を持つていても、その身体は年頃の乙女だ。淫気に当てられ続け、熱を持ってしまふのは避けられない。

——見つけた。

群がる触手の隙間に、見慣れたコスチュームの一端を見つけたのは、触手の海の最も奥に進んだときだった。振り返れば、機械だらけの実験場が遙か遠くに見える。リリナの鮮やかな金色コスチュームは白濁したエキスに染まり、美しい金髪も頬にべっちよりとへばりついている。常人、いや、魔法少女ですら快楽に狂うほどの精気を浴びながら、なお瞳を希望に燃やし、前に進むことができるのは、リリナの魔力が他のそれを遙かに凌駕しているからに他ならない。

だがそれだけではない。リリナにはどうしても助けたい者がいた。そのためなら、どんな目にあっても構わないと思えるほどの者が。その想いが、リリナの魔力をさらに洗練させ、彼女の足を前へと進ませる。

奥に進もうとするリリナを阻もうと、触手は次々に群がってくる。知性はなくとも、魔

族としての本能が、この奥に囚われた少女と、リリナを接触させる危険を察知している。だが、魔将クロウブをも一対一であれば倒せるほどの力を持つリリナを、オークやゴブリンなどの低級魔物よりもさらに下に位置する触手如きが、いくら群れをなしたところで止められるはずもない。リリナは触手を切り裂き、ついに彼女にたどり着いた。

「ミュ、ミュっつ!!」

何度も名前を呼び、リリナは彼女に駆け寄った。リリナの鮮やかな金色とは正反対の、透き通った氷のような、淡い青のコスチューム。触手に拘束され、リリナに勝るとも劣らぬ媚体をくねらせているのは、リリナのパートナーである、白銀の魔法少女ミュだった。

「リ、リリ、ナ……。必ず来てくれると、思っていましたわ……」

「ミュ……ッ」

リリナは大切なパートナーの姿に言葉を失った。

ミュの股間には、いままで見たこともないような極太の触手が挿入されている。膣から覗くそれにはびつしりと突起が生え、一つ一つがグニグニと蠢いていた。リリナと同じく強大な魔力を持つミュを拘束するためだろうか、コスチュームのあちこちに触手がへばりついている。見たところ魔力は失われていないが、へばりついた触手から絶えず淫気が注入され、魔法の発動を妨害しているようだった。

「あ、あああつ!!」ミュはリリナがいままで聞いたことのない声を上げ、ビクビクと震えた。

「ミュっ……」

リリナはミュに駆け寄った。震える手で触手を握りしめる。いままでずっと魔法少女たちの嬌声を聞きながらも耐えてきたリリナの精神が、はつきりと揺れていた。

「リリナ、見ないでください……。わたくしの、イヤらしい顔……あああつ！ 見つめないでえっ」

ミュは再び身体を揺すった。豊満な乳房はさらけ出され、たふたぶと波打っていた。同じ部屋で暮らし、片時も離れたことのない幼なじみ。お風呂だって何度も一緒に入った。ミュの裸は見慣れている。

なのに、触手に犯され、快楽によがる親友の表情は、その気がないリリナですらも息が詰まるほどエロティックだった。もちろん、ミュだってリリナに恋愛感情など抱いてはいない。にもかかわらず、二人はしばらく見つめあった。

「リ、リリナ……っ」「う、ごめんなさい。すぐに助けるわ！」

我に返ったのは同時だった。リリナは慌てて、ミュの身体に巻きつく触手を切り裂いていく。だが、陵辱され続けたミュはすでに身体に力が入らず、自由になっても「ああ……」と吐息を漏らし倒れてしまう。リリナはそれを抱き留めた。

「リリナ、早くこれを抜いてください……あ、ああんっつ!!」最後に残った股間の触手を指し、ミュは懇願する。

「うん。ミュ、少し我慢して」リリナは喉を鳴らし唾を飲み込んだ。親友が上げる女の声

に、リリナはいままでの凜々しさが嘘のように動揺してしまっていた。

手袋に包まれた手で、ミュの股間に埋もれた触手を掴む。じゅぶりという感触が背筋をぞわぞわと駆け上ってくる。触手がびくんと硬直し、ミュは「はあああんっつ！」と、リリナの耳元で悲鳴を上げた。

「ああっ！ ミュ……っ」

リリナは泣きそうな声を出し、一気に触手を引き抜いた。じゅぶぶっ！ ずぼぼぼおおっつ！！ ドロドロに蕩けた音とともに、ミュの秘部から触手が抜け出てくる。

「あひいひいひいっつ！！」ミュは背筋を反らせて啼き叫んだ。イボイボが隆壁を抉るように刺激しているのだ。淫液に浸けられ発情しきった身体が燃え上がり、白銀の魔法少女を牝の高みに押し上げる。

「イ、イクっ！ イッちゃううっつ！！ 見ないでリリナ！ あああっ、お汁でちやうのおおおっつつ！！」

ぶっしやあああああああつっ！！ 触手が引き抜かれたと同時に、ミュの股間から極まった牝汁が噴き出した。リリナはミュを抱きしめる。

「ミュ、ごめんなさい、ごめんなさい……っ！！」

「……だ、大丈夫です……わたくし、は……ん、あ……」

ミュは淡く微笑んだ。そして、ようやく自由になった手を広げる。ところどころに穴が空いた痛ましい手袋に光が集まると、それは美しい水晶に変わった。

「リリナ、みんなを助けましょう」

「……ええ。転移魔法は組んであるわ」

ミュに応え、リリナは杖を喚び出す。ミュの水晶から光が溢れる。それと同時に、触手の海に銀色の光が灯る。一つや二つではない。いくつもの光が、水晶に繋がる。

「リンク完了」

普段はおっとりしていても、心に秘めた正義の心は誰よりも強い。いくら身体を穢しても、魔法少女ミュの心までは穢すことなどできないのだ。快楽に肩を震わせ、口の端から艶めかしく涎を零しながらも、ミュは魔法を使ってみせた。

「ありがとう」

リリナは微笑む。リリナが攻撃ならば、パートナーのミュは補助。戦場を把握し、仲間を守り戦況をコントロールする。水晶から放たれたミュの魔力は、この場にいるすべての魔法少女に繋がっていた。そして、その光を受けた者は、リリナの攻撃魔法で傷つくことはなく、それどころか力を受ける。

リリナの杖に光が集まる。魔法少女たちの中でも段違い、いや、魔族の中にも存在しない、膨大な魔力が渦巻く。だがそれは、リリナの魔力のほんの一端でしかない。

転移魔法が発動し、ミュにリンクされた魔法少女たちが次々に転移していく。要塞を脱出し、魔法少女たちの街へ飛んでいるのだ。あとは、リリナが魔法を放ち、触手の海を消し去るのみ――。

そのとき、ふとりリリナは妙な胸騒ぎを感じた。

鎧を着た大男クロウブ。確かにリリナは奴を倒した。強さは他の魔物と比べものにならないし、あの男が戦場をかき乱さなければ、あの日ミュが連れ去られることもなかっただろう。

だが、この実験施設はなんだろう。リリナは違和感を拭えなかった。魔族と人間は違う。だが、あのような武闘派の魔族が機械を操り、データを収集し、実験に励む姿がどうしても想像つかない。それに、確かに自分は他の魔法少女を凌駕する力を持っているが、果たして本当に、こんなにもまく事が運ぶものなのだろうか……。

「リリナ、あとは、わたくしたちだけですわ……」

隣で魔法を使っていたミュが、瞳を閉じゆつくりと倒れた。仲間たちがすべて転移したことを確認し、気が緩んだのだろう。リリナはハツとして、ミュの身体を支える。

（大丈夫よ。ミュは助けられた。わたしとミュが揃えば、どんな相手でもきつと……）

不安を振り払い、リリナは魔法を放つ。触手、そして無数の機械が、金色の光に吞まれて消滅していった――。





（オ、オチンポが挿入<sup>はい</sup>つてきますわ！ わたくしのオマンコを、せ、征服してくるっ!! お、奥まで突かれたら負けてしまいます！ ぬ、抜くのよ!! 腰を振って抜かなければあつ）  
 進入してくる欲望の塊を抜かなければならない。沸騰する思考の中でミュは必死にそう考えた。しかし、対する身体の反応はそれとは真逆のものだ。

にちゅっ、ぎゅぶぶっ、にちゅうううっ!!

「いい締めつけだな」魔物が言った。

「くほおおっ！ ーし、締めつけてなどいませんわ!! お、お抜きなさいっ！ この穢らわしいオチンポを、ひぎっ、お、おおおっ!! お、奥にきちやうっ!」

ガクガクガクツツ! ぶっしやあああああつ!! 結合部から愛液の飛沫が迸る。明らかかなアクメだが、ミュは首を振って決してそれを認めようとはしない。膣が小刻みに震え、幾度となく絶頂を繰り返している。

「この女、面白いナ」

「急げ、ソロソロ時間だぞ」

ミュの感じっぷりを愉しみ、ゆらゆらと腰を揺らしていた魔物を、他の魔物たちがたしなめた。「ソウダナ」と、魔物は言った。

「トドメを刺してヤロウ。魔法少女ミュ」

「ト、トドメでしゅって!! やってみなひゃ……わたくひは……んいっ!! ひぎいいいいいいいいいっ!!」

ずぼおおおおっつ!! まさしくトドメの一撃だった。ぬるく少女をいたぶっていた魔物は、その膂力でもって、牡槍を魔法少女の最奥へと一気にぶち込んだ。膂壁がカリ首に扶られ、最も大事な子宮口へカウパーがぬり込まれる。欲望の穂先は子宮口を舐り、しゃぶり、感じるどころを容赦なく突き上げた。

甘く切ない刺激から、全身を灼き焦がす雷撃へと、刺激は一気に変化した。ミユの総身がガクガクと痙攣し、耐えきれず崩壊してしまう。

「んほおおおおおっつ!! イクツ、いきゅうううううっつ!!」

浅ましい牝豚の咆哮とともに、ミユはあっけなく絶頂した。膂口で焦らされ、クリトリスを撫でられただけでアクメしてしまう身体が、膂を侵略され屈しないはずもない。白い喉元を晒し、押さえられたブーツのつま先が何度も痙攣した。グラブに包まれた手がベツドシーツを握りしめ、痙攣する腰は快楽を求めくねり汗にテカる。

「ドウシタミュ? 負けないのではなかったのか?」魔物はミユの耳元で囁いた。

「ひうあっ! ううう、お、おほおおおお...。ま、負けてませんわ! わたくし、イッたくらいでえ...オチンポに敗北なんて、ひいんっつ!!」

「ソウカ。なら、これから貴様の子宮に膂内射精してヤル。悦べ、貴様の大好きなオークの精液ダ」

「オ、オーク!? いやあああっつ! おやめなひやいつ! わたくし、そんなもの好きじゃありませんわ! そんなの、膂内射精されたことなんて、ありませんのおっつ!!」

腰を動かしながら言う魔物に、ミュは目を見開く。豚の魔物の精液を流し込まれるなんて、屈辱以外の何物でもない。そして、この淫乱な身体が、スペルマの一撃に耐えられるとは到底思えない。

「クク、記憶が封じられていたか。安心しろ。膣内射精した後、また封じてヤル」

「な、なにを……!! ひぎいいいいっつ! は、激しく……くほおおおおっつ!! わ、わたくひ、まだ思い出していないことが!? ひあつ! あ、ああああつ!! オチンポビクビクだめですわ! だ、射精しては、射精してはだめええええええつ!!」

涙に濡れる視界に、周りの魔物たちが肉棒を扱っているのが見える。一斉にぶっかけてくるつもりなのだ。被虐の快楽が頂点に達しようとしている。魔物の腰使いは、一撃を放つための激しさをもって、ミュを頂上の見えない悦楽へと押し上げていく。

「いやあああああつつ! イク、イクイクイク!! だめですわ! わたくし、またオチンポに敗北してしまっつ! 屈服しちゃうううううううっつ!!」

「——射精するッツ!!」魔物が叫び、子宮をぶち破らんばかりに腰を打ちつける。

どぶつ、びゅるるううううつ!! ついに、発情しきつたミュの膣に、灼熱の白濁液が噴出した。同時に、周囲の肉棒も一斉に火を噴き、ミュの全身に穢らわしい汁が降り注ぐ。

「くほおおおおおおおおおおっつ! イグイグイグううウウううううううっつ!!」

お嬢様ヒロインの面影もなく、ミュは無様に絶叫した。止まらないアクメの波が少女を呑み込み、精液の熱が全身を駆け巡って淫猥な媚体を灼き尽くす。膣全体が放たれた牡汁



に悦び、子宮が音を立てて汁を呑み込んでいく。

ガクガクッ、ピクッ、ガクガクガクンッ!! 痙攣が止まらない。白目を剥き、情けなさすぎるアへ顔を見せ、白濁にまみれた魔法少女のコスチュームを着て絶頂し続ける。ぼつてりと熱い唇からは舌が零れ、まさしく敗者にふさわしい姿だった。

ズボオオッ! 最後の一滴まで精液を射精し、魔物はペニスを抜いた。ゴボゴボと、開きっぱなしの膣口に泡が立ち、白濁液と愛液の混ざった汁が漏れ出ている。肉棒を引き抜いた後も、ミュはしばらく痙攣し、絶頂を続けていた。

「あへあ……あが……あああ……。ど、どういう、つもりです、の……? わたくしに、オークの精液を射精しても、なにも、起こりませんわ……!」

ようやく意識を取り戻し、ミュは息も絶え絶えに問いかける。己の子宮が、未だに精液を呑み込んでいるのを感じる。だが、改造されていない身体にいくら魔族の精を射精しようと無駄なはず。ミュはそう思っていた。

(こ、ここから、魔物を出すわけには、いきませんわ……!)

魔力を絞り出し、床に落ちた水晶を操ろうとする。敗北し、淫乱な身体を自覚してもなお、街を守ろうとする健気な魔法少女。だが、その想いが実を結ぶことはなかった。

「あ……え、あ……っ?!」

カチカチと、頭の中で音がした。まるで、鍵が外れるような音——そう思ったときには、ミュの意識は蘇った記憶に呑み込まれていた。



(でも、でも、こんな気持ちいいの、あああつ！ た、耐えられないわ!!)

改造された身体が快感に弱すぎる。せめて魔力があればと思っても、魔力が戻る気配はなく、その思考も魔悦に染まっていく。

「あ、あへあ……ああああああ………!!」

絶頂の衝撃は次第に収まっていった。収まるにつれ、リリナは思考を取り戻していく。再び絶頂してしまった後悔、敗北の悔しさ——それよりも先に感じたのは、おぞましい危機感だった。

「あ、ああああつ！ だめ、だめええええええつ!!」

(ア、アソコの力が抜けるっ！ ダメよそんなこと……ああつ、出てきちゃうっ!!)

絶頂の後に待っているのは脱力だ。そしてそれは、魔物が産まれてきてしまうという事実と、もう一つの絶望をリリナに突きつけてくる。

「ひ、ひあ……しよ、処女……わたしの処女が……!!」

涙に滲んだ視界に、魔学者の姿が映る。表情は見えず、声も聞こえないが、リリナはクロウブが、ニタニタとあの意地の悪い笑みを浮かべているのがわかった。

「い、いやっ、やめてええつ！ 出てこないで、あはあつ、ち、力が、入らないっ!!」

脱力した膣の中を大きな塊が進んでくる。そんなものが抜け出れば、処女の証など一瞬で破られてしまう。

(しゅ、出産で処女を奪われるなんて……ひあああああつ！ き、気持ちよすぎて、抵抗



できなひつ、あああああつっ!! で、出る……んひいいいいいつつ! ゆ、許さない、許さないのに、あ、あああああつ、また、白目むいちやうううつ!!)

ガクガクと、少女の瞳がまたしても白く変わってしまふ。涙に濡れた白目敗北顔を晒す魔法少女の処女膜が、大きく広げられた腔に引つ張られ悲鳴を上げる。処女を失いつつあるのがわかつて、リリナにはどうにもできない。痛みもない。痛みなど、改造された魔法少女の身体には快感でしかない。

「イ、イク……またイツちやうつ! 出ちやうつ、赤ちゃん産まれちやうつ!!」

プチ、プチプチと破壊の音がする。愛液に赤いものが混じる。そして――。

ぶりゅつ、じゅぶじゅぶじゅつぽおおおおおおおおおつっ!! 腔から腕が飛び出した。小さな手だが、そこには鋭い爪と、ゴツゴツとした血管が浮かび上がっている。間違ひなく魔族の手。そして、それはリリナの乙女の証を一気に貫いていた。

「ひぎいいいいいいいい——ツツ! だ、だめへええええええええええつ!!」

処女喪失——しかも内側から破られるという屈辱に、リリナのマゾ悦楽は容易く限界を突破し、またしても正義のヒロインはアへ顔絶頂をさせられてしまふ。さらに、快楽に屈し魔物の出産も止められないという敗北感がリリナの心を打ちのめした。

(出産すごいのおおつ! なんでこんなに、き、気持ちいいのおつっ!!)

だが、ヒロインの身体を貫くのは、いままで感じたこともない異常な悦楽だ。身体中すべてが性感帯のように燃え上がり、快感神経が前面に押し出されたような錯覚すら感じる。

空気に触れただけで絶頂に達し、気持ちよすぎてたまらなくなる。意識が朦朧とし、リリナは白目を剥いたまま幾度となく失神した。

「くほおおおっつ！ あひつ、イグううううつ、あああんつ、ひあああああつっつ!!」

あられもないイキ声を上げながら、愛液を撒き散らす変身ヒロインに、魔物たちの白濁液が振りかけられる。コスチュームがどんどん白濁に染まり、精液と愛液の入り混じった淫猥すぎるニオイがリリナからももうと立ちのぼった。

魔物はついに、痙攣する母体から抜け出してきた。蜘蛛の顔に、魔物のゴツゴツとした身体が続く。魔物が抜けていくたびに悦楽はエスカレートし、出産悦楽がリリナを狂わせる。

「はへあつ、あつひいいいいいいいいいいいっつっつ!!」

魔物の脚が抜け、出産を終える頃にはもう、魔法少女は息も絶え絶えになり、しかし意識を失うたびに悦楽で覚醒し、快樂地獄に屈服しかけていた。

「どうです、リリナさん。出産のときにこそ、極上の快樂を得られるようにしてあげたのです……クク、聞くまでもなく、悦んでいただけただけですよですね」

茫然自失とする魔法少女に、クロウプの声がかけられる。

「あううう……い、いやあ……わたし、魔物を……っ」

産まれてきてしまった蜘蛛型の魔物に、リリナは涙を流した。魔物からは濁った金色の魔力が溢れていた。リリナのそれを受け継いだのだ。



一突きで、牡の肉棒はリリナの膣口から子宮までを貫いていた。千を優に超える肉棒を啜え続けた膣は、それでもまだキツイ締めりを保っていたが、痩せぎすの男の剛直は、締まる膣肉をぐりぐりと抉り取るようにしてかき分けながら侵入してきた。イボが擦れ、さらにイボから灼熱のエキスが分泌される。

リリナの口から、嬌声とともにだらしなく舌が飛び出した。白目を剥き腰を振り、たまらない肉欲に無様なダンスを踊る。

「あなたを犯したのは初めてですが……いい締めりですね。心地いいです……よっ!! こうすればもつと締めりますか?」

クロウプは、ひくひくと刺激を求める不浄の穴へ指を突っ込んだ。

「ひぎあつ! ん、ひいひいひいっつ! お、お尻っ、やあああんっつ!!」

「おお、締めりますねえ。どうしたのですかその声は? あなたを犯しているのは、身体を改造し、魔物たちに命じてあなたを犯させた男ですよ?」

クロウプに囁かれ、リリナはブルブルと震えた。しかし、それは怒りのせいではない。圧倒的な屈辱と、マゾヒスティックな悦びから来る愉悦の震えだった。

(わ、わたしっ、なんて情けないの!? 敵に、クロウプに犯されて感じちゃってる!! 反撃しないといけないのに、ま、魔法少女のコスチュームどろどろにされてえっ! た、闘うためのスーツなのに、汚されるのが気持ちいいのっ!! いいっ、お尻も感じるわ!!)

パッシイイイイインッ! さらにリリナを被虐地獄へ落とすかのように、クロウ

ブは平手で少女の尻を打った。強烈な音とともにリリナの尻が真っ赤に染まり、牝豚ヒロインはたまらず仰け反ってガクガクと痙攣する。

（た、叩かれてるわ！ わたしのお尻が、あああつ！ この姿も街中に流れているの!? みんなごめんなさいっ！ こんなわたしを見ないで！ あああつ、い、いやつ、そんなこと思っちゃダメ……み、見て欲しいなんて、 あああつ！ でも、でもでも、お尻叩かれるのイイツ！ 無様で惨めで……さ、最高よおつっ!!）

思考が悦楽に支配される。言葉が口から漏れ出てしまいそうになる。しかし、最後の理性が、ヒロインとして抵抗しなければならぬという矜持が、それを押しとどめる。墮ちない……墮ちたりしない！ 心でなにを思っても、絶対に屈服しないっ!!

（き、きてるわ!! クロウブのオチンチン膨らんでるっ！ ビクビクして、熱くてっっ!! きちやうの!! な、膣内射精するのね!! リリナのアソコに膣内射精っ！ 魔法少女のイヤらしいところに種付けレイプ……あ、あああああつっ!! すごいいいいっっ!!）

「さて、射精しますよりリナさん」

男はどこまでも冷静に言った。しかし、剛直は熱く乱暴に、しかしリリナの感じるところを的確に刺激し、射精へと昇り詰めていく。

たまらない。コスチュームが汚れていることも、淫らに喘いでしまっていることも、敵の首魁に犯されていることも、惨めな自分も、ポテ腹を晒していることも、すべて！

肉棒が膨らみ、精が解き放たれる。その瞬間、リリナのすべてが真っ白に染まった。

どぶつ、びゆるるううつつ！ ぶつしやああああああああつつ！！

「くほおおおおつ！！ イグウウウツツ！！ ボテ腹アクメしちゃうううううつつ！！  
あああつ、の、濃厚ザーメン、か、感じちゃうのほおおおおんつつ！！」

（あ、熱いひいいいっつ！！ しゅ、しゅごいつ、な、なんて闇の魔力なのほおおおつ！！ トドメさされちゃうつ！！ こんな射精されたら、わらひ、わらひもうらめええええええつ！！）

なにかが弾け飛ぶような感覚が、リリナの脳裏を走った。絶頂の中、白濁する思考の中に、おぞましい黒い影がよぎる。だが、それもすぐに快楽に流され、消えた。

ドクン、ドクン……！ 射精された精液が脈動を始める。何体の精液がボテ腹に詰まっているのかわからない。だが、クロウブに腔内射精された瞬間、それをトリガーとしたかのように、それはにわかに活気づいた。

「あ、が、ひぎっ！ んんっ、んはああああああああああああつつ！！」

クロウブがいきり勃つ怒張を引き抜いてすぐにそれは起こった。快楽に喘いでいた美少女ヒロインたちは、お腹を押さえて転がった。

「はひっ、んひいいいいいっつ！ な、なんですのこれはあつ！？」

「ま、魔力が、あああんつ！！ あ、熱いひいいいっつ！！」

クロウブを筆頭とした魔物たちは、それを見守っていた。街の各地で闘う魔法少女、そして、乱れる二人に邪な視線を送っていた街の人々も、恐怖を浮かべてそれを見ていた。



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**



# キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ？



ドキドキラブな  
ハーレム系ライトノベル！

二次元  
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう！  
かなり過激なライトノベル！

二次元  
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※「二次元ドリームノベルズ」は18歳未満の方は購入できません

日常に密着したエロス、リアルな  
舞台設定で送る官能小説レーベル！

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?  
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラブ！

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの公式サイトにて！

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



あなたのキモチイをお手伝い!

# キルタイムのアダルトコミック誌!

業界唯一! エロラブ&エロコミック満載!!

電子書籍も配信中!



## 2次元 ドリームマガジン 2D DREAM MAGAZINE



## コミック UNREAL

# ヒロインピンチDX

詳しくはKTCの公式サイトにて!

キルタイム

検索



書店、ダウンロードサイトなどで好評発売中!

※いずれも18歳未満の方は購入できません。